事例７

＜全学年対応＞いじめの防止に向けた取組

Ⅰ．評価の視点を踏まえた授業の工夫

①いじめの問題を自分ごととしてとらえるために、「自分がそのクラスにいたとしたら、何ができただろうか。」と発問した後に、補助発問として「なぜ、このクラスの生徒は、それができなかったのだろうか」と問いかけ、行動することの難しさを実感する。

②巻末にある６枚の写真といじめの問題の関連性について考えることで、「わたしのせいじゃない」と見て見ぬふりをしている自分自身に気付かせ、これまでの行動を振り返ることにつなげる。

Ⅱ　学習指導案

１．日時　：○○○○（令和○○）年　○○月○○日（○）　第○校時

２．学級　：第○学年○組

３．主題名：社会正義　Ｃ－（１１）　公正、公平、社会正義

４．ねらい：正義と公正さを重んじ、自分の身の回りで起こる様々な出来事について、偏った考え方をしたり見て見ぬふりをしたりせずに自分事としてとらえ、よりよい社会を実現するために行動しようとする心情を育てる。

５．教材名：「わたしのせいじゃない―せきにんについて―」（岩崎書店）

６．主題設定の理由

（１）価値について

内容項目Ｃ－（１１）は「正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること」をねらいとしたものである。「正義を重んじ」るということは、正しいと信じることを自ら積極的に実践できるように努めることであり、「公正さを重んじ」るということは、私心にとらわれて事実をゆがめることを避けるように努めることである。よりよい社会を実現するためには正義と公正さを重んじる精神が不可欠であり、物事の是非を見極めて、自他の不公正に気付き、それを許さないという断固とした姿勢と力を合わせて積極的に努力することが重要である。

（２）生徒の実態について

生徒は、自己中心的な考え方や偏った見方をしてしまい、他者に対して不公平な態度をとる場合がある。また、周囲で不公正があっても、多数の意見に同調したり傍観したりするだけで、制止することができないこともある。そのため、いじめや不正な行動等が起きても、勇気を出して止めることに消極的になってしまうことがある。また、社会の在り方についても目を向け、現実の社会における矛盾や葛藤を見出すこともある。自分の弱さや社会的な問題に向き合い、同調圧力に流されないで必要に応じ自分の意思を強くもち、それを克服して、正義と公正を実現するために力を合わせて努力することが大切である。

（３）教材について

「わたしのせいじゃない―せきにんについて―」は、いじめの状況と、責任のなすりつけあいが描かれた絵本である。泣いている男の子を前に、登場人物たちがそれぞれの立場でさまざまな言い訳をしている。また、絵本の後半には、「原爆」「少年兵」「ごみ問題」などの写真があり、読み手に多くのことを語りかけてくる。いじめの積極的な加害者ではなくても、無関心であったり消極的であったりすることがいじめを助長していること、そして、社会で起きている様々な問題にも関連していることに気付かせたい。

7．教材分析

場面（話のすじ）	登場人物の心の動き	気付かせたいこと 考えさせたいこと
学校の教室で、ひとりの男の子が泣いている。そのことについて、「知っているが何もしない」「止められなかった」「たたいた」「その子のせいだ」など、それぞれの立場の 14 人が言い訳をしている。	泣いている姿だけが描かれている。	・男の子が泣いているのは誰のせいなのだろうか。 ・14 人の考えや行動について。 ・自分がそのクラスにいたとしたら、何ができただろうか。
『わたしのせいじゃない？』という言葉の後に「原爆」「少年兵」「ゴミ問題」など、６枚の写真がある。		・この絵本の後半に写真がある理由。 ・いじめも世界で起こる問題も性質は同じということ。

8．主体的・対話的で深い学びにせまるための授業の工夫

（1）絵本へとつながる導入

導入で「人との関わりの中で、見て見ぬふりをしてしまった経験」を共有し、誰しも「わたしのせいじゃない」と考えてしまうことがあることに気付かせる。

（2）絵本の魅力を生かす

絵本を 50 インチのスクリーンに映すことにより、絵を見やすくし、内容をより深く理解できるようにする。また、絵本を２度読むことにより、いじめ問題への話し合いを深めた後、絵本の後半に写真がある理由への理解が深まるようにする。

（3）自分ごととして捉えるための発問

14 人の考えや行動について考えた後、「自分がそのクラスにいたとしたら、何ができただろうか。」を考えさせ、自分ごととしてとらえさせる。また、「なぜ、このクラスの生徒は、それができなかったのだろうか」と問いかけ、行動することの難しさについて考えられるようにする。

（4）校内における「いじめの防止」に向けた取組と関連させる

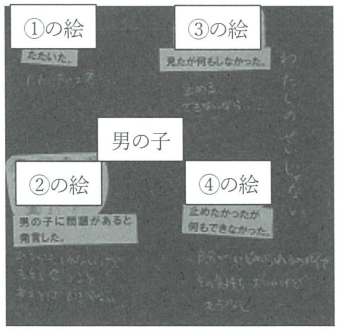
平成 25 年に施行された「いじめ防止対策促進法」に基づき、学校はいじめ防止基本方針を定め、いじめの防止のための取組や早期発見、いじめ事案への対処の在り方、教育相談体制や生徒指導体制、校内研修などの対策を総合的かつ効果的に推進している。この法律の中で、教育の充実は学校が講ずべき基本的施策の１つに定められている。学校は、生徒の道徳心を培い、心の通う対人交流の能力の素地を養うことがいじめの防止に資することを踏まえ、全ての教育活動を通じた道徳教育及び体験活動等の充実を図らなければならない。このことから、いじめを防止するためには、全ての職員が協力体制を築き、道徳教育を含めた様々な取組を学校全体で計画的に遂行していくことが必要である。校内における「いじめの防止」に向けた取組の中で「わたしのせいじゃない」を実施し、いじめ防止に対する授業効果がより高まるようにする。

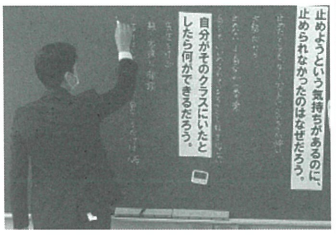
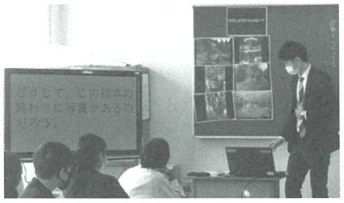
9．本時の評価の視点

視点１－① 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしていることに着目する。

視点２－⑤ 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる部分に着目する。

10. 展開

段階	学習活動	予想される生徒の発言や考え	指導上の留意点・支援 (評価にかかわる点は☆)
導入	(1) 人との関わりの中で、見て見ぬふりをしてしまった経験について聞く。	・困っている人がいるとわかっていたのに、何もできなかった。 ・道を尋ねられたが、わからないといって去ってしまった。	・迷いや葛藤の末に行動に移せなかった経験とその時の気持ちについて考えさせる。
	単純に「見て見ぬふり」をしてしまった経験を聞くと、人との関わりが出てこないことがあるため、「人との関わりに」の中で「見て見ぬふり」をした経験ついて考えさせる。		
展開	(2) 教師の範読を聞く。 (1度目は絵本部分のみ) 		・絵本を50インチのスクリーンに映して見やすくする。
		・登場する１４人の考えや行動を４つに分ける。 ② 「たたく」などした→6、7人目 ②男の子に問題あると発言→8～14人目 ③見た(知っていた)が何もしなかった→1～3人目 ④止めたかったが何もできなかった→4、5人目	
		板書カードを使い、黒板にわかりやすく提示する。	
	(3) 登場する１４人について話し合いを進める。 男の子が泣いているのは誰のせいなのだろう。 (①～④の生徒は具体的に何が悪かったのだろう)	・この場にいた１４人全員が悪い。	・すべての生徒に問題があることを共有する。 ・①→②→③→④の順に「具体的に何が悪かったのか？」を聞いていき、問題点を浮き彫りにしていく。
	 	①について ・たたくのは絶対にだめだ。 ・泣いているのはこの子たちのせい。 ②について ・自分勝手な考えだ。 ・男の子に問題があるという考えは間違いだ。 ③について ・見ているだけではだめだ。 ・傍観者もいじめている人と同じだ。 ④について ・止めようとしたことは良いが、行動しなかったことは良くない。 ・①と同じでいじめている人と同じ。	・見ているだけでもいじめに加担している。全員の行動が男の子を泣かせていることを再確認する。
	止めようという気持ちがあるのに、止められなかったのはなぜだろう。	・たたいている人たちがこわかった。 ・多くの人が男の子に問題があると感じているから行動できなかった。 ・自分がいじめられると思ったから。	・ワークシートに記入し、自分の考えをまとめられるようにする。

	自分がそのクラスにいたとしたら、何ができるだろう。  	・みんながいないところで男の子に話しかける。 ・勇気を出して注意する。 ・止めることはできないかもしれないけれど、先生に相談する。 この補助発問により、絵本の中の出来事を自分ごととしてとらえて考えることにつなげる。	・意見が出た後に、「なぜ、このクラスの生徒は、それができなかったのだろう」と補助発問し、行動に移すことの難しさを理解した上で、自分に何ができるのか考えさせる。 ☆自分のクラスや身の回りでいじめが起きたとき、どう行動すべきか、自分ごととして考えている。（視点１－①）
展開	（４）再度、教材を範読する。 （２度目は最後まで） 中心発問 どうして、この絵本の終わりに写真があるだろう。 「いじめの話の後になぜ写真があるのだろう？」など問いかけると理解しやすい。 	・目の前で起こるすべてのことが私のじゃないか問いかけるため。 ・いじめも世界の問題も本質は同じだと気づかせるため。 ・「わたしのせいじゃない」とみんなが思うから問題が大きくなる。 ・見て見ぬふりをしていたら、自分たちにもこんな世界が訪れるかもしれないと気付かせるため。 実感を深めるために、タンカー事故で油にまみれた鳥の写真を取り上げ、「原油を一切使わずに生活できる人はいるだろうか。」など、私たちの生活と関連づける話をしてもよい。	・範読後に写真を黒板に貼り出し、写真について補足説明する。 ・ワークシートに記入し、自分の考えをまとめられるようにする。 ・意見が出しづらい場合は、周りの人と話し合うようにする。 ・いじめも世界で起こる問題も性質は同じであり、「わたしのせいじゃない」という考えが問題を大きくしていることに気付かせる。 ☆自分にも「わたしのせいじゃない」と見て見ぬふりをしていることがあることに気付き、自分自身の行動を振り返ろうとしている。（視点２－⑤）
終末	（５）感想を記入する （６）感想を発表する		・今後の自分自身の行動について考えながら感想を記入させる。 ・感想を発表し合うことで、級友の気持ちに触れ、思いを共有できるようにする。

Ⅲ. 授業の工夫についての考察

（1）絵本へとつながる導入

「人との関わりの中で、見て見ぬふりをしてしまったこと」は、日常生活の中で誰もが経験していることである。しかし、経験について発表させすぎてしまうと、導入が長引いてしまうことがわかった。「経験」よりも「どんな気持ちになったか」に焦点を当てることで、見て見ぬふりをしたときの後味の悪さを共有することができる。見て見ぬふりをしたときの気持ちの共有は、「いじめ問題」や「世の中で起こる様々な問題」の話し合いの中で生き、生徒が「自分自身もわたしのせいじゃないと言っている一人かもしれない」と考えることへとつながった。

（2）絵本の魅力を生かす

絵本を使った道徳科では、絵が多くの情報を伝えるため物語の状況をつかみやすく、その補足として言葉が加わるため、物語に入っていくことがより容易になると感じる。「わたしのせいじゃない」では、泣いている男の子といじめを行う他の人たちが対照的に描かれており、絵本を見るだけで男の子の心情やいじめた側の子どもたちの表情、クラスの重たい雰囲気が伝わってくる。テレビ画面に映すことで、絵の様子が読み取りやすくなり、絵本の内容を生徒にわかりやすく伝えることができた。そして、生徒に深い印象を与えられたと感じた。

また、絵本を２度読むことにより、「いじめの問題」と「世の中で起こる様々な問題」の両方を深く考えることができた。１度目の範読では、絵本の部分だけを読むことにより、いじめの問題に焦点をあてることができた。生徒たちは、自分たちに身近であるいじめの問題を活発に話し合うことができていた。２度目の範読では、絵本部分を読み終えた後、「実は、この絵本には続きがある」と話して写真部分を見せた。「わたしのせいじゃない？」という言葉が大きく映し出され、「原爆」「戦争」「ゴミ問題」などがテレビ画面に映し出すと、クラスの雰囲気が引き締まったことを感じた。２度の範読により、生徒たちはクラスで起きるいじめ問題と世の中が抱えている様々な問題とをより深く結びつけることができていたと感じる。

（3）自分ごととしてとらえるための発問

学校では近年、道徳科の授業をはじめとして、いじめに対する正しい考え方を生徒に伝えている。そのため、多くの生徒の心の中には、「いじめる人だけが悪いのではなく、見ているだけの人（傍観者）も同じように悪い」「いじめられる人に問題があるのではなく、いじめる人に問題がある」という意識が根付いている。しかし、実際にいじめを目の当たりにした際には、頭ではわかっていても行動に移せないという生徒は少なくない。集団がつくりあげた悪い流れの中で、一人だけ別の行動をとることはとても難しく、そして勇気がいることである。

発問「自分がそのクラスにいたとしたら、何ができるだろう」では、生徒から「止めるのは難しいけれど、先生を呼んでくる」「親、家族に相談して解決方法を探す」「みんなが見ていないところで、男の子にそっと話しかける」などの意見が出てきた。それらの行動をとることの難しさを実感させるために、意見が出そろった後に補助発問として「なぜ、このクラスの生徒は、それができなかったのだろう」と問いかけた。考え込んでしまう生徒も多くいたが、「わかっている」けれど「行動できない」という弱さ掘り下げることにより、いじめの問題についてより深く考えることができたと感じている。

また、これらの発問は、中心発問にも影響を及ぼしていたと感じた。「原爆」「少年兵」「ゴミ問題」などの写真を見たあとに、「どうして、この絵本の終わりに写真があるだろう」と問いかけると、生徒たちからは「私のせいじゃないと言っている人のせいで問題が起こっている。そのことを理解するため。」「これらのことは他人ごとのように見える。でも、私のせいじゃないと言っていると、明日も平和な未来が待っているとは限らない。」「自分と切り離してしまい、現状から目を背けてはいけない。」などの意見が出された。絵本「わたしのせいじゃない」の強いメッセージ性を最大限に生かすためには、このような発問の工夫がとても大切であることを再認識した。

（4）校内における「いじめの防止」に向けた取組と関連させる

道徳科「わたしのせいじゃないーせきにんについてー」の授業効果を高めるためには、道徳科の授業前後における継続した取組が必要である。

今回の道徳科「わたしのせいじゃない」は２年生で実施したが、この授業を行う前段階として、１年生では絵本「しらんぷり」を使った授業を実施していた。絵本「しらんぷり」は、いじめの問題についてストレートに描かれた作品である。この授業を通して、１年生の段階で生徒たちはいじめの悲惨さやいじめが与える影響について深く考えることができた。

また、道徳科「わたしのせいじゃない」の実施後には、川崎市PTA連絡協議会主催の「いじめ防止標語コンテスト」に向けた作品づくりを行った。授業を行った後にいじめ防止標語を考えさせることで、道徳科の内容を振り返り、生徒一人一人が「自分はどうあるべきか」を考えながら標語を作ることができていた。また、標語の中には、道徳の内容が反映されたものが多く含まれていた。

このように、道徳科「わたしのせいじゃない」を１時間の授業だけで終えるのではなく、「いじめ防止基本方針」の中に定めるなど、３年間を見通した学校全体の取組の中の一つとして実施することにより、授業が学校生活に及ぼす効果はより高まると感じる。校内で継続した取組を行うことにより、生徒たちは学校生活の中で起こる「いじめの問題」や「世の中で起こる様々な問題」を自分ごととしてとらえ、自分たちの未来へ生かそうとする姿勢につなげることができると感じる。

【校内における「いじめの防止」に向けた取組例】

指導体制

職員間の意思の疎通	・職員の一丸化、取組事項の意思統一を強化する
	・「生徒がいるところには教員がいる」を徹底する
	・いじめチェックシートを定期的に実施し、全職員で生徒の状況を把握する
学校の指導体制	・教職員、心理、福祉等の専門家などで構成される組織を設置する

生徒指導

心のケア	・日々の関わりで生徒に寄り添い、変化がないか観察する
	・教育相談を定期的に実施し、その情報を全職員で共有する
心を育む指導	・いじめ防止に関する道徳科を実施する（１年「しらんぷり」２年「わたしのせいじゃない」）

保護者連携

情報共有、発信	・日頃より連絡を密にし、生徒の変化を確実に情報共有する
	・三者面談を定期的に実施し、その情報を全職員で共有する。
	・授業や行事への参観、各種通信、HP、メール配信等により学校の情報を発信する

外部との連携

外部機関との連携	・SSWや児童相談所、警察など関係機関と連携する
小中連携	・職員および児童生徒の交流を実施し、相互理解のもと一緒に育む体制を確立する
地域連携	・地域教育会議を通して情報共有、発信し、地域の大人全体で生徒を見守り育てる